

いしづち

2024.7

JULY

No.159



公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>



四国中央の家
道後温泉本館保存修理工事
世界建築紀行 ロンドン散策と湖水地方への小旅

1	四国中央の家		道上壯/V u A……①
2	道後温泉本館保存修理工事		一級建築士 野本 健……③ 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……③
3	世界建築紀行	ロンドン散策と湖水地方への小旅	西予支部 松山 清……⑨
4	委員会報告	鍵谷カナ頌功堂 愛媛の登録有形文化財 文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和……⑬ 第2回景観写真コンテストとその舞台裏 文化財・まちづくり委員会 委員 中山百合子……⑭ 景観賞を終えて 審査委員長 北村 徹……⑯ コンテストを終えて 文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和……⑯ とびだせ建築士「橋をつくろう」 青年委員会 委員 白石 耕平……⑰ 令和5年度全国青年委員長会議報告 青年委員会 委員 武智 良太……⑱ 堀部安嗣講演会「これからの住まいを考える」 青年委員会 前委員長 和田 崇……⑲ 女性委員会「暮らし+（プラス）勉強会」 春色トピアリー作りワークショップに参加して 女性委員会 委員 鷲尾ひろみ……⑳ 「暮らし+（プラス）勉強会」に参加して 女性委員会 委員 尾崎 千尋……㉑	
5	支部報告	松山支部より	松山支部 支部長 花岡 直樹……㉔
6	けんちくの輪	建築の異邦人 建築士から見た空き家問題	松山支部 藤岡 俊樹……㉖ 西予支部 水口 優太……㉗
7	お知らせ	第1回・第2回理事会概要報告	事務局……㉙

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



透明水彩、ペン

題：「大山祇神社・御神木」
サイズ/F4

愛媛県今治市と広島県尾道市を結ぶしまなみ海道の中心にある大三島に、大山祇神社は鎮座しています。御祭神は大山積大神一座。天照大神の兄神に当たり、古事記・日本書紀には「山の神」と記されています。
本殿正面にそびえる御神木は「小千命ーおちのみこと（乎知命）御手植の楠」と呼ばれ、大山積大神の子孫「小千命」によって植えられたと伝えるもので、その時代は神武天皇御東征前と云われています。樹齢は2600年あまり。

資料/大山祇神社HPより

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ
1980 小学校から高校まで松山在住
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞（愛媛県建築士事務所協会主催）
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
1996 日本工業大学建築学科 卒業
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」（新潮社）の装丁担当
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞（東京/日動画廊）
2010 愛媛県美術館に作品「ドライブフラワー」收藏される
2015～17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載
絵画教室やオリジナルブランド額工房「櫛リチエルカ」を設立
2017 「えひめの塗り絵」を出版
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
現在、現代日本美術会 会員/審査員



SI.House Southwest

YM, Houseの竣工から2ヶ月後、さらに繋がって実現した建築はSI.House「四国中央の家」だ。
その当時/2008.01-2009.03/
僕はこんなことを考えていた。

この住宅は「3つのスペース」から構成されている。「外庭」「中庭」「インテリア」。宅地として十分な広さを持つ120坪の敷地を、機能ごとに単層のスペースとして3分割してある。

外庭は、道路や隣地へダイレクトに繋がる。中庭は、外庭へφ209mmの丸開口を通して点的に繋がり、インテリアへはガラス開口を通して連続的に繋がる。インテリアからは、部屋と一体化した中庭と、微かに気配を感じる外庭といった繋がり方になる。3つのスペースの関係性を少しずつ変えることによって、住宅としての開放感とプライバシーの確保を考えている。

インテリアは、南北それぞれに中庭を配置することで、すべての部屋が中庭に面する構成となる。そして、リビング・ダイニング・ユーティリティ・寝室を、連続する1つの大きな空間として捉え、使い方に応じて折戸やカーテンで分割と連結が可能となっている。また、様々な組み合わせによる空間の可変性を最大限発揮できるように、収納の大半を可動家具としている。

外庭と中庭による二重のバッファゾーン。季節、家族構成、使い方によって空間の形を変えるインテリア。何か、新しい住まい方、新しい家族のあり方が生まれてくるのでは、と期待している。



SI.House Living Room

これまでの2棟の住宅の考え方と比べると、この時の僕の住まいに対する考え方が、変わってきていることがわかる。端的な言葉で乱暴に言い切ってしまうと、住宅の遺伝子が「呼応」→「反復」→「可変」と変異していることが分かる。

遺伝子の変異は外的要因、つまり、外部環境の変化への適応として起こってくるものである。SI.Houseのクライアントとの打ち合わせの際、こんなやり取りがあった。

「ご夫婦とお子さん2人で、4人家族なんですね。」
「子供は、もう1人いてもいいかなと思ってるんですよ。」

この時、僕の住宅の遺伝子が突然変異を始めた。この住宅を、4人家族で考えてはいけない。5人になっても、ひょっとしたら2人になっても、この住宅に住まうメンバーがどんなに変わっても、フィットし続ける住宅であり続けなければならない。住まうことに対する「可変性」を空間にすると、建築にすると、どんな住宅になるのか？空間構成や平面構成への新しい塩基配列を、僕は一生懸命考え始めた。

間取りが変えられる。空間の形が変えられる。空間の可変性が、内部空間の大きなテーマになり、空間を分けたり繋げたり、使い方に応じて自由に部屋の形を変えられることが大命題となった。そこから生まれてきたのが、大きな一部屋を折戸やカーテンの開閉で、分けたり繋げたりするというアイデアだ。

もう一つ、住宅の全体構成を刺激する、こんなやりとりもあった。

「敷地の半分程度を庭や駐車場の外構として計画しておいて、将来、お子さんが家を建てたくなった時、敷地として使えるようにしておくのはどうですか？」

「いや、全部使って下さい。もしそうなったら、子供には別のところで考えてもらうつもりです。」

40坪程度の住宅を、120坪を超える敷地に計画するという難題は揺るがなかった。平屋の計画だけでは敷地を使い切れない。単なる80坪の外構だと、この敷地でなくてもいいわけだ。ただ単に40坪の住宅が地面に置いてある。そんな住宅にはしたくなかった。この敷地を全て使い切って、この敷地だからこそ考え得る住宅にしなければならない。外部空間の「存在意義」を敷地利用計画に組み込むと、どんな配置計画になるのか？内外連続・不連続への新しいゲノム編集を、僕は一心不乱に考え始めた。

内と外の二元対比では、60坪対60坪になり、住宅の面積が大きくなり過ぎるし、内外の関係性としては単純過ぎる。住宅の40坪程度を守りながら敷地全体を使うには、40坪+40坪+40坪に分けて、それぞれにきちんとした意味や機能を与えてやることだ。そしてそこから生まれてきたのが、120坪の敷地を3分割して「インテリアという庭」「中庭」「外庭」の機能を帯びさせるというアイデアだ。



SI.House Bedroom



SI.House Courtyard

「空間の可変性」と「3つの庭」この二つの遺伝子が組み込まれた住宅がSI.Houseだ。将来の可能性やクライアントの要求といった外的要因へのスタディの結果として、突然変異的なアイデアが生まれてきた。しかし、それらはとても理にかなったことであり、次なる本質へと繋がってゆくものでもあった。

SI.Houseは、僕の建築の変異点、特異点になった。こんな考え方で、新しい建築に辿り着けるという発見でもあった。一見住宅らしからぬ住宅だが、でも、しっかりとこの地ならではの佇まいと趣を携えている住宅でもある。考えあぐねていた塩基配列が、まるでスライダーを上げたファスナーのように綺麗に噛み合ってくれたのがこのSI.Houseだ。建築として噛み合ってくれただけではなく、クライアント家族とその生活にも15年も噛み合ってくれた住宅でもある。

THE HISTORY OF DOGO ONSEN

Conservation and repair work

道後温泉本館保存修理工事

執筆： 一級建築士 野本 健

監修：文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹



▲ 素屋根解体後の道後温泉本館

〈おことわり〉

以下記載内容は、現在の道後温泉本館保存修理工事の状況や収集できた文献から総合的に判断した内容を記載している。そのため、調査状況により新たな知見が得られた場合、記載内容に訂正の必要が生じる可能性はある。

〈謝辞〉

梅津 秀基様

廣見 秀行様

福本 雅美様

【文化財建造物保存技術協会】



▲ 前期工事（火の鳥）



▲ 後期工事（大竹伸朗さん）

はじまり

道後温泉本館保存修理工事は平成31年1月15日から始まり、令和6年7月11日に全館営業を再開した。観光業への影響をなるべく抑えるため、営業しながらの保存修理工事であった。

平成31年1月15日からの前期工事の期間は神の湯東西浴室を男湯と女湯に分けて営業を行い、令和3年7月15日からの後期工事の期間は霊の湯男子

浴室、女子は旧神の湯女子浴室を霊の湯女子浴室に変え、営業を行った。

道後温泉本館保存修理工事では大きく3つの目的があり、それは「屋根の葺替」をはじめとする文化財建造物の修理、「地震への備え」、「設備の更新」であった。



▲ 前期営業



▲ 後期営業

屋根の葺替について

道後温泉本館を覆う屋根の瓦や銅板を解体し、屋根の下地材など傷んでいる箇所は部分的に修理するなど大規模な工事を行った。屋根を解体する間、建物を風雨から守るため、素屋根という建物を覆う大型のテント膜を設置した。

素屋根のテント膜に図柄を印刷し、覆われている期間も観光客に楽しんでもらえるよう、前期工事では手塚治虫の「火の鳥」、後期工事では画家の大竹伸朗さんのデザインを採用した。

神の湯本館の瓦は菊間瓦が使用され、全体で約3万2千枚の瓦を解体し、傷んでいた瓦を新たに作り直した。この瓦は補足瓦と言い、修理前の瓦と細部まで再現し、製作に努めた。ちなみに神の湯の瓦の方が南棟の瓦より少し大きくて重い。



▲ 前期工事の銅板解体状況

道後温泉本館保存修理工事

瓦の下には防水の役割として土居葺が施されており、神の湯本館では手割の杉板、南棟では杉皮が使用されていた。今回の保存修理工事では屋根の傷みの少なかった神の湯本館を除き、屋根の下により防水性能を高めるため、防水シートを設置した。

防水シートを設置することで杉皮自体の使用は本来不要であるが、保存修理工事では当時の工法、材種を後世に伝えることも重要な工事の1つであり、瓦の下で見えなくなる、部材に関しても同種の材料を使用して工事を行った。



▲後期工事の瓦解体状況



▲土居葺（神の湯本館）



▲防水シートと杉皮葺（南棟）



▲修理前の瓦（神の湯本館）



▲修理後の瓦（神の湯本館）



▲屋根の棧木（南棟）

地震への備えについて

道後温泉本館の見た目を変えないよう建物の構造を補強することが大きな課題であった。

床下、壁の中には主に構造用合板を張り、天井裏には天井ブレースを設置して構造補強を行った。

旧神の湯女子浴室は当初補強を浴室側に増打ちコンクリートの予定であったが、陶板壁画を割らずに解体することが難しく、中央廊下側に補強を施した。

一番時間がかかり大変だった工事は神の湯東西浴室の構造補強であった。当初は「可逆性」を優先し、浴室側に鉄骨の構造補強材が見えてくる予定であったが、話し合いの末、新しく設置する補強用のコンクリートの基礎、壁を浴室の壁と緊結させた。

新しい基礎は床下に設置し、その基礎を地盤と繋ぐため、「アースアンカー」を施工した。アースアンカーの掘削機は一番小さい機器を選定したが、現場への搬入は数センチしか余裕がなく、狭い本館内部を慎重に確認しながら進めた。所定の位置で約14mから16mの深さまで掘削しアンカー（引張材）を人力にて挿入した後、アンカー周囲をセメントで固め、地盤と緊結させた。試験を含んだ合計9本を約1ヶ月かけて施工した。



▲天井裏の構造補強（玄関棟南側）



▲中央廊下側への構造補強



▲鉄骨搬入（神の湯浴室）



▲構造補強（神の湯浴室）



▲アースアンカー挿入状況（神の湯浴室）

道後温泉本館保存修理工事

文章だけでは大変伝わり辛いが、道後温泉本館の保存修理工事は建物がある状態での工事のため、狭い隙間を潜りながらの工事となり施工は大変難しいものであった。

屋根貫通の構造補強
(玄関棟)



設備の更新について

建物ばかりに目が行ってしまいがちだが、道後温泉本館はそもそも温泉で成り立っている施設である。観光施設であるため、休館は年間に1日しか取ることを許されず、電気や給排水設備はどうしてもその期間内にできる工事しか行えなかった。そのため、使用しない配線や配管を撤去する時間がなく、小屋裏や床下の空間に無数に張り巡らされていた。

今回の保存修理工事では不要な設備を撤去すると

共に、今後の設備配管の更新をしやすいするため、ピットなどの空間を設けた。

また今回の設備更新で特筆すべきことは、中央廊下の陶管の発見であった。



中央廊下の陶管



▲ピット空間 (霊の湯女子脱衣室)



▲中央廊下掘削状況



▲ 陶管と浴室の接続部

道後温泉本館の心臓部とも言える中央廊下を掘削したところ、約2m下から温泉を排水するための陶管が見つかった。

陶管と現在の各浴室からの接続部を見ると、後から横穴を設けて接続していることから、昭和10年の神の湯東西浴室の工事に取り付けた物だと考えられた。

一方、現在は使用されていない接続部跡も神の湯側で3カ所見つかり、明治27年に建設した神の湯本館の「一ノ湯」「二ノ湯」「三ノ湯」の浴室の位置と一致することから、神の湯本館建設時にこの陶管は敷設されたものと考えられる。

このように外からは目に見えない部分で多くの困難がある中、道後温泉本館の保存修理工事を行った。

実測調査を行いながら工事の方針を決める工事であったため、長い期間、何度となく打ち合わせを行い、多くの人々の知恵と労力を結集した、保存修理工事後の道後温泉本館を是非お楽しみいただければと願う。



▲ 修理後の中央廊下



▲ 実測調査の様子

■あしがき

愛媛県美術館で令和6年9月16日～11月4日まで「本館改築130周年道後温泉ものがたり一湯のまの歴史と文化」が開催予定である。道後温泉本館で収蔵していた美術品や保存修理工事において重要と考えられ保管の必要のある瓦などが展示される。

今までこの「いしづち」にて掲載した絵画などが観覧できる貴重な機会であるため、興味のある方は是非間近で見ていただき、道後温泉の歴史を体感していただければ幸いと願い筆を擱く。

■参考文献

「道後温泉 増補版」

*本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。

1 大英博物館に憧れて



▲大英博物館正面ファサード

ロンドン中心部にある大英博物館は人類の歴史を展示している世界一の博物館なので、子供の頃から一度は行ってみたいと思っていた。イギリス王室をはじめコレクターが世界中から集めた超一流の展示物があり、特にエジプトのミイラがどんなものなのか見たかった。また、博物館のファサードはイオニア式のエンタシスにペディメントを載せた、アテネのパルテノン神殿を思い出させるような姿をしており、建築的に博物館自体の平面配置や造りがどうなのかも興味があった。

ロンドンへは2度訪問。1度目は2017年に夫婦で街並みを散策に、2度目は2023年コロナ明けにひとり旅でディープに大英博物館と向き合い、エジンバラと湖水地方にも足を延ばした。

2 最近現れたランドマーク

2.1 ロンドンアイ

ロンドンは東西に蛇行して流れるテムズ川に沿って歴史的にも有名な建物が建っていて、中心部に高架道路がないため昔からの街並みが大切に維持され、景観がとても良い街だ。ロンドンアイはビッグベンの対岸にあり、テムズ川に突き出した形で造られているため、川の上からの展望を楽しむことができる。例えて言うなら隅田川の真ん中で観覧車が回っているようなものだ。カゴ自体も大車輪の軸に吊り下げられているのではなく、最上部ではゴンドラの下部を持ち上げるような作りで、空に飛び出る感があっ



▲テムズ川のロンドンアイ



▲ゴンドラ

ととても開放的だ。

しかし家内で行った時は終了時刻をよく調べずに訪れたため、札止めで乗車できなかった。二度目はネット予約をしてお昼頃に行ったのでリベンジできたが、人気スポットなので日本のように簡単に乗れると考えたことを反省した。



▲テムズ川とビッグベン

2.2 トランシーバー



▲トランシーバー側面



▲展望カフェとバルコニー

正式にはウォーカー・トーカーという名だが、頭でっかちな形状から無線マイクに似たイメージがある。ロンドンっ子らしい愛称で、テムズ川沿いのシティに2013年完成したこのビルは、最上階37階展望台まで無料で上れるというので人気があり、行ってみたらカフェレストランとオープンバルコニーには大勢の人で溢れていた。ロンドンの展望も良かったが、テムズ川を挟んで対岸に建っている三角形の尖ったビルがやたら気になる。それはレンゾ・ピアノ設計のザ・シャードだった。



▲ザ・シャード



▲トランシーバー

2.3 ザ・シャード

ザ・シャードは2012年完成。トランシーバーから見たテムズ川越しの屹立とした姿を忘れることが出来ず、2度目の訪問の際には必ず上まで行こうと心に決めていた。高さが309.6mで“シャード”とは硝子の断片を意味する。72階の屋根のないオープンスペースからはテムズ川を一望でき、眼下にはタワーブリッジがあった。このビルは、機能性よりもシンボル性を選んだのだ。

最上階まで予約して上ってみた。高層ビルは世界中何処でもそうなのだが、展望台へ行くこと自体がエンタメ化していて、長蛇の列になっていた。ポンピドゥー・センターや関空ターミナルビルなどの作品を見ても、レンゾ・ピアノはガラスカーテンウォールの魔術師だ。



▲72階オープンスペース



▲タワーブリッジ

3 地方への小旅

3.1 ストーンヘンジ

ロンドンから世界遺産ストーンヘンジ、バースの街並みとコルウォッツ村の日帰りツアーに、1度目の11月4日に参加。集合場所はヴィクトリア駅で、早めに着いて待っていると、60代の男の方が「ホテルで一緒でしたね！」と話しかけて来て、すぐにはピンとは来なかったが、家内が朝食が一緒だったとすぐに気づき、旅の計画など話が弾んだ。航空会社は違うけれど帰りは同じ日で、奥さんは海外旅行が嫌いなので一人で来たんだと話されていた。何だか気持ちのわかるような気がした。1日ツアーらしいが我々とは行き先が違って、ハリーポッターのロケ地コルウォッツ村巡りをされるそう。

ストーンヘンジ行きのバスはSt. ジェームスパークを通りハイドパークから西の空港方面へと走った。



▲ストーンヘンジの巨石群

通りには既にクリスマスデコレーションが始まっていて、電飾やウィンドウの中の動く人形のディスプレイなど、賑やかだった。

その後、高速道路を南西方向へと走り地平線が広がるが、雨が酷くなりガスっぽい景色の中を走り続けた。この辺りは大平原で、それも北海道よりもダダっ広い草原なので、多少の起伏はあるもののあまり景色の変化がない。一眠りして起きても、さほど景色は変わらず、牧草地のような草原が続いたが、目的地のストーンヘンジが近づくとその中に放し飼いされたたくさん豚が見えてきた。豚には家族単位に家があり、大きなドラム缶を半分に切って伏せたような豚の家が多く点在していて独特の風景だ。やがて大草原の遙か彼方に、大きな石を立てた遺跡のようなストーンヘンジが見え始めた。それは、お墓である、あるいは儀式のランドマークだという諸説があり、未だに造られた目的は謎のままだが、このような全く石のない所に巨石を持ってきた、ということが世界遺産の価値らしい。

巨石文明の謎について思いを巡らした後、イギリスで唯一温泉があるバースの町を訪れた。ここには王室も温泉にやって来るそうで、バス(=風呂)の語源にもなったという。ロイヤルクレセントを中心とする「バースの街並み」は世界遺産になっていて、ローマ浴場跡はテルマエ・ロマエの世界だった。

最後にハリーポッターのロケ地となったレイコック村へ立ち寄った。とても小さな村なのであつという間に一回りした。ツアーにはハリーファンの女性一人旅の方も数人いたが、映画をあまり知らない自分にとって、この時間は宝の持ち腐れだった。「賢者の石」ロケ地のレイコック・アビーも訪れたのだが、帰ってから映画を鑑賞して改めてその背景を理解できたので、貴重な体験だった。



▲ロイヤルクレセント

3.2 エジンバラ城とロイヤルマイル

2度目の旅、3月4日にスコットランドの首都エジンバラを訪問し、ロイヤルマイルを歩いた。ロイヤルマイルとは街の真ん中の小高い岩の丘の1マイルの道で、エジンバラ城からホルロードハウスというエリザベス女王の宮殿まで続き、世界遺産でもある。



▲ロイヤルマイルと聖ジャイルズ大聖堂

朝一の便でヒースロー空港からエジンバラへ向かうため、早朝にホテルを出発、地下鉄ピカデリー線で空港へ向かったが工事のため途中で運休となり、あまり進んでいないのにボアーズコートで下ろされて、バスに乗り換えて空港へ行けという。あの人に聞きこの人に聞きしたが、結局たらい回しで空港まで行けるか不安になってきた。薄暗い中、一瞬途方にくれたが、辺りを見渡しているとタクシー発見！これはもう高い安いと言っている場合では無い、と考えドライバーに声をかけた。というか、向こうからグッドモーニングと言ってきたので、空港まで利用させてもらい、ターミナル5に無事辿り着いた。

エジンバラ空港へは午前10時過ぎに到着。なかなか広いターミナルなので外へ出るのに延々と歩いた。エアリンクという市内行きのバスはすぐに見つかった。料金は運転手に払えば良い、とガイドブックにあったので£20札を出したら、お釣りが必要な人は駄目という。市内まで往復£7.5なので困っていると、駐車場ビル内に両替機があると教えてもらいお金を崩すことができた。

問題はまだまだ続く。エジンバラ城の入場券は当日現金で購入できなくて、事前ネット予約・決済が必須条件なのだ。ガイドブックには入場券売り場があってそこで購入できると書いていたが、世界は電子マネー化が一段と進んでいた。チケット売り場は予約済みのメールとチケットの交換所になっていた。同様にホルドハウス宮殿への入場券も住所やクレジット情報をスマホに打ち込まねばならず、予約したエジンバラ城入場待ちの時間ができたので、昼食のフィッシュ&チップスを食べながら一人で悪戦苦闘した。

城前広場のレストランでのフィッシュ&チップスは本格的なもので、ボリューム満点。注文してから魚を揚げるため時間を要したが、マジで食べたのは初めて。魚が大きいのとチップスも量が多くて食べても食べても減らない。味は白身魚でマックのフィレオフィッシュ5個分くらいはあるがとても美味しい。揚げたてなので新鮮味もあり、コーラと一緒に食べたらお腹一杯で、見た目の予想通り食べきれなかった。

その後エジンバラ城の正面から入場、門を抜ける頃1時の時報の大砲が鳴った。ちょっと遅し、名物を見逃してしまった。

エジンバラ城は大きな岩の上に建てられた堅牢な要塞で守りも固い。国の公式な行事なども執り行われているので、もっと大きな城を想像していたが規模はこぢんまりとしていた。エジンバラの象徴で、町もよく見渡すことができるくらい眺望が良い。大勢の観光客が押し寄せていて、どこからこの人々が集まるのだろうというくらいだ。大砲も周囲に向かって設置されていて、過去にも多くの戦いがあったという歴史を物語っていた。

エジンバラ城からロイヤル・マイルを歩いてみた。お城からポリドールハウス宮殿までの通りは古い石造りの堅牢な建物が建ち並び、他に類を見ない中世の街並みだ。観光客で溢れかえり、エジンバラがこれほどまでに華やいだ人気のある町だとは想像だにしておらず、スコットランドの華のような町だった。

ホルドハウス宮殿もオーディオガイドによって案内されたが、王室の暮らしや華やかな日常と歴史を感じさせる空間で、エリザベス女王が愛した宮殿の雰囲気を感じた。



▲エジンバラ城への上り道

3.3 ピーターラビットの湖水地方

エジンバラの後、3月6日は湖水地方日帰りツアーに参加。朝、集合場所のユーストン駅に着いてみると、一人の若者がツアー予約表の紙を開けて持ち、構内を歩き回っていたので、ガイドかと思いを掛けたら、一緒に参加する神戸の男子学生・原君だった。日本人と話をしたので少し気が楽になった。しかし、ガイドの姿は出発直前になっても現れない。メールでeチケットが届いていることに気付き、それで列車に乗車した。ガイドは駅の集合場所にはそもそも来ないのだ。それなら集合場所などと案内しないで欲しかった。誰かが来て説明があると思ってしまった。原君は同行者・木村君との卒業旅行だった。

湖水地方の入り口オクセンホルムまでは1等車で快適だったが、駅の構内で知り合った原君と木村君の帰りの飛行機がストライキのためキャンセルになったという一報が入り、



▲ピーターラビットの舞台ニア・ソーリー村



▲ヒルトップ ▲点在する湖にて若者たちと

その対応で列車に乗っている間、慌ただしかった。帰国して翌日が就職予定の会社のリモート研修があるという木村君はどうしても自宅に帰りたいそう。一方、原君は明日ハリーポッター巡りをするので、エールフランスからKLMオランダ航空への振り替え便で帰るといふ。二人の主目的が違うという混乱に巻き込まれて、結局結論がでないまま私はアドバイザーとして思案することになってしまった。

オクセンホルムには列車が少し遅れて到着。数人の参加者が集まってきた。オクセンホルムの町を案内してもらい、ピーターラビットの生まれたニア・ソーリー村へと向かう。作者のビアトリクス・ポターは湖水地方の風景に憧れて、この地に住み作品を世に送り出した。ピーターラビットもポターも、私は少しは聞いたことがある程度。ポターの家ヒルトップや湖が点々と続く丘、それに石垣で区切られた農場などのどかな景色がラビットの作品を誕生させたのだ。作品の背景の村の景色や家の中の家具など、ファンにはたまらないものだろう。もっとピーターラビットの物語りやナショナルトラストを知ってから来れば良かったのだが、少々勉強不足かも。

その後、細い道を9人の旅人を乗せた小型バスはウィングミア湖を目指した。いくつもの丘を越え、その都度、心安まる景色が我々を迎えた。まだ、春の気配も感じられないほどの寒い季節なのに、湖で泳いでいるグループもいて、ガイドは“クレージー”と叫んでいた。ウィングミア湖クルーズは冷たい風のため船の中に入りたかった私に、若い原君が屋上で観光しよう、と言うもんだから、冷たい湖水地方の風を浴びながらウィングミア湖遊覧を楽しんだ。空は曇っていてまだ春になる前の空気だった。結局、船内へは入らず、うちの息子よりもうんと若い原君と木村君とお喋りをしていた。その後はアフタヌーンティーをいただいて暖まり、列車でロンドンのユーストンまで帰ってきたのは午後9時を回っていた。

4 ロンドン雑感

ロンドン市内は効率的に巡るため、1度目の時はガイドをお願いした。王室の結婚式が行われるウエストミンスター寺院・セントポール寺院、ロンドン塔やグリニッジ天文台を案内してもらった。ウエストミンスター寺院は床一面が墓標であり、周辺には歴代王の棺が並んでいる墓所だ。そこで戴冠式が行われる。

ロンドン塔では王室の誇る世界一の560カラットのダイヤや衛兵の交替が見られた。市内のバック



▲セントポール寺院

◀ウエストミンスター寺院



▲ロンドン塔



▲衛兵の交代



▲エジプトのミイラ



▲古代エジプトの壁画

ンガム宮殿や郊外のウィンザー城も訪れ、ちょっとこれまでのお城のイメージが現実的なものへと昇華していった気がする。

大英博物館は古代エジプトやメソポタミアなどの文明の遺跡や出土品の展示が特に素晴らしく、その一端



▲展示室に囲まれた中庭グレートコート

に触れることが出来たが、これまで知らなかった日本の展示も探してみた。大英博物館の展示はグレートコートの回りの1、2階が広々として主なものはすべてそこにあるが、日本のギャラリーは屋根裏部屋のような5階で、人の流れからは全く隔絶されていた。三菱商事がスポンサーだったが、日本として考えるべきだろう。

2度目は博物館全体を隈なく回ったが、見るべきものは殆ど前回ガイドの案内で見えて、さらに理解を深めることができた。しかし、それよりもロンドンの地下鉄に乗り、街並みを歩いて感じたことの方が私にとっては収穫だったように思える。それはロンドンそのものが博物館であり、世界を制覇し民主国家として発展してきたイギリスを物語っているようであり、教会や芸術施設、王室の城など輝きを放つ魅力的な建築が、この国が世界の中心として発展したことを証明していたのだった。

鍵谷カナ頌功堂

愛媛の登録有形文化財

文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和

鍵谷カナ頌功堂しょうこうどうは松山市西垣生町1253番地にある国の登録有形文化財で、2001年（平成13）県下では17番目に登録された。字のごとく鍵谷カナの功績たまたを頌えるもので、伊予織物同業組合が昭和4年（1929年）に建立した。建物の中央には頌功碑が納められている。

頌功堂は鉄筋コンクリート造平屋建、日本瓦本葺で建築面積は39㎡、柱中央部の寸法は450mm程度、八角形の一边は1900mm程である。設計は木子七郎、大工は岡野政市であった。



▲長楽寺の敷地内にある鍵谷カナ頌功堂。ずっしりとしたエンタシスの円柱は建物に落ち着きを感じさせる



▲敷地奥の碑には設計「木子七郎」建築「岡野政市」と刻まれている

木子七郎は松山出身の実業家、新田長次郎の長女カツ（カツ子）と結婚、新田に気に入られ愛媛にも様々な建築を残した。鍵谷カナ頌功堂は愛媛県庁と同年の竣工で、中国の庭園に見られる亭ちん（中国風東屋）を感じさせる造りとなっているが、柱は中央部に膨らみを持たせたエンタシスが施され、柱頭には料枱がある。宮内省内匠寮技

師を父に持つ木子らしい、和洋中をうまく取り入れた見事な建築である。

大工・岡野政市は新田に目をかけられ、棟梁として木子と共に萬翠荘を建てたと聞く。木子を「キッコさん」と呼び、木子も萬翠荘建設前の外遊時、岡野を誘うなど親交は深かったようである。服を持っていないからと外遊を断る岡野に、「下着だけ持ってくればいから」と木子が服をすべてそろえてくれたという逸話がある。

鍵谷カナと伊予かすり紼

鍵谷カナは1782年（天明2）に伊予郡垣生村今出います（現松山市）の農家に生まれた。同村の農家・小野山藤八に嫁ぎ、享和年間（1801－1804）に今出います紼を考案したと伝えられる。今出います紼発明の起源について、鍵谷カナ頌功堂碑（松山市西垣生町・長楽寺）の碑文には農家の藁屋根の葺き替えの折に見かけた押し竹を縛った跡のまだら模様に心ひかれ、これを織物に応用して織ったものが始まりと記されており、また三島神社（西垣生町）の碑文には金羅羅参拝の旅行中、寛政末（1800）年頃に創始された久留米紼を見て、自ら織りだしたとする説が記されている。当時は農家の婦女子が副収入を目的とし、農作業の合間を見て紡いでいた。

その後全国へ流通し伊予かすり紼と呼ばれるようになり、瞬く間に紼産業のトップとなった。大正末期には手織りから織機となる事で大量生産され、270万反余りの最高生産記録を達成した。

鍵谷カナは幕末の1864年に亡くなり、その後の繁栄を見ることはなかったが、伊予かすり紼は日本3大紼（備後紼・久留米紼）と呼ばれるまでになった。

文化を繋ぐ登録有形文化財

登録有形文化財は建設後50年が経過し、①国土の歴史的景観に寄与しているもの。②造形の模範となっているもの。③再現することが容易でないもの。が登録の基準となっている。近年価値が見いだされず壊されていく近代化遺産建築が多く含まれているのが特徴である。数十年前の身近な建物は、私たちの生活に大きく関係しており、建築的な価値もそうだが文化的な価値が非常に高い。二世帯、三世帯前の文化を今に繋げてくれる貴重な文化財と言える。鍵谷カナ頌功堂も先に述べた建築・産業的要素だけでなく、正岡子規、村上露月などの俳人や伊予農業銀行の誕生など、様々な文化的要素を今に伝えてくれている。

第2回景観写真コンテストと その舞台裏

2023年6月1日～12月31日

委員会報告

4

文化財・まちづくり委員会 委員 中山 百合子

「今回の景観写真コンテストは、Instagramコンテストにしてみたらどうでしょう」。昨年私が発したそのひとことのせいで、「では、責任者は中山さんということ……」ということになってしまいました。ああ、口は禍の元という諺があったよね。と思い出した時には既に遅しでしたが、こういうコンテストを企画するのも人生で滅多になく、面白いかもしれないと、軽いノリで引き受けてしまいました。

Instagramコンテストを提案したのには訳があります。従来のように、写真を撮り・印刷し・郵送又は持参する、というのは手間とお金がかかります。権威と伝統がある知名度の高いコンテスト（例えば新聞社・雑誌社主催など）ならともかくも、失礼ながらほとんど建築士しか知らない協会主催のコンテストに、手間とお金をかけて写真を応募してくる人はあまりいないと考えました。その点、Instagramならば、素敵な写真を撮る誰かの写真にハッシュタグさえ付けてもらえれば、広まる可能性は十分あります。かくいう私も、素敵な写真にそういうハッシュタグを見つけては「へえ、こんなコンテストがあるなら応募してみようか」と心が動くことがあるからです。数秒で投稿ができるInstagramコンテストは、今やあらゆる団体が開催され、アマチュアカメラマンの励みになっています。同じ文化財・まちづくり委員会のメンバーの方にもInstagramアカウントを作ってもらうことにして（後日講習会を実施）、コンテストにご参加いただくことになりました。

さて、ここで問題になったのが「景観写真コンテスト」の「景観」という言葉です。景観が何かを定義しなければ、応募してくれる人が困ります。いくつかの国語辞典のページをめくり、そこである事実に遭遇しました。

私たち建築士は、景観というと、建物のある風景という風に解釈しがちですが、辞書にはそんなことは書かれていないのです。

ある場所から眺めたとき目にはいるけしき。ながめ（三省堂国語辞典）、風景。景色。特にすばらしい眺め（小学館大辞泉）、①風景外観。けしき。ながめ。またその美しさ・②自然と人間界のことが入りまじっている現実のさま（岩波書店広辞苑）などなど……。世間様にとっての景観と、建築士にとっての景観はかなりの乖離があるのではないかという疑いが浮上し、いい機会なのでそれも検証してしまおうと、「建物」というキーワードは除外することになりました。

それに「建物」というキーワードを入れてしまうと、投

稿写真数が大幅に減ることが予想できました。一般の方が建物の写真を撮る場合、松山城や大洲城といった城と花火、内子町や大洲の古い街並み、お寺とお遍路さんの後ろ姿くらいは撮りたいと思うかもしれませんが、住宅を撮ることは皆無でしょう。住宅には表札という個人情報があり、洗濯物・自転車・箒やちりとりなど生活感にあふれたものがあり、おまけに家人に見とがめられて「盗撮ですか」と警察沙汰になってしまう危険性もあります。建物というキーワードは無いほうが自由な作品が期待できると話し合いました。

問題は次々に起きました。本当にインスタコンテストで写真が集まるのかと言われても、「人気Instagramマーさんがハッシュタグを付けてくれたら爆発的に広まります」としか言えません（のちに、受賞歴の多い人気Instagramマーさんが多く投稿してくれるようになりました）。

コンテストの写真をどこに展示するかという話になったときは、「建築士会館」という堅実な案が出ました。無料で使えるというメリットはあるものの、一般の人が建築士会館を探し駐車場料金を払って写真を見に来ることは無いだろうと思い、市内中心部にある人気スポット国指定重要文化財「萬翠荘」を借りていただくことにしました。ここならば、建物を見にきた観光客は自動的に写真コンテストを目にすることになり、愛媛の観光に一役かえるのではという思いもあったからです。

そうして試行錯誤を重ねながら実施した景観写真コンテストは、最終的に3200件を超過応募をいただき、今度は写真が多すぎて選ぶのが大変という事態になった中から、入選の25作品を選びました。

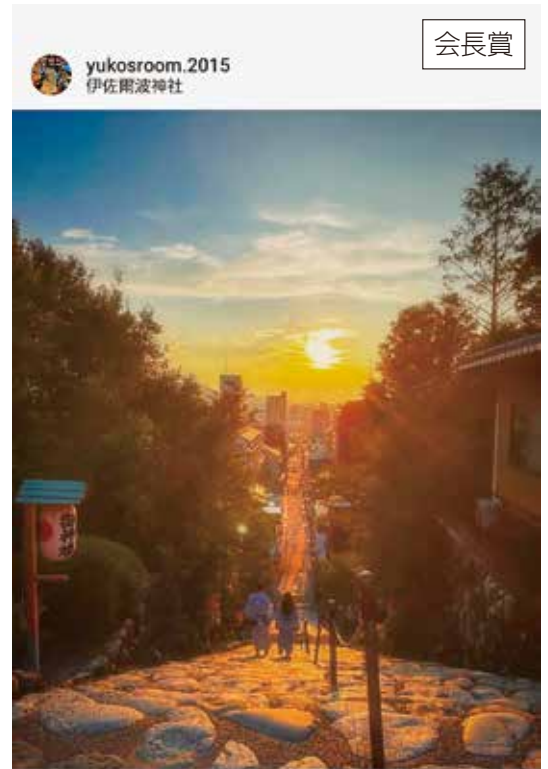


▲多数のご応募をいただきました。

2024年2月25日、コンテストの表彰式に訪れた人たちを見て、「若いな」と感嘆の声をあげられた方がいました。そう、本当に若いのです。もしかしたら10代と思われる若者もいて「次の景観コンテストにも絶対応募しますから」と力強く答えてくれました。

今年度2024年は、景観写真コンテストはお休みします。来年度実施するのか、担当は誰になるのかわかりませんが、頑張ってください。多くの一般の人が、愛媛県建築士会主催の「第3回景観写真コンテスト」が開催されるのを待っています。

最後になりましたが、関わっていただいたすべての皆様、写真を投稿して下さった皆様、応援をして下さった皆様、講評をいただいた北村様、どうもありがとうございました。心から感謝いたします。（ホームページにカラーで掲載しております）



▲表彰式に訪れた皆様、ありがとうございました。

景観賞を終えて

審査委員長 北村 徹

なんとも凄まじい数の応募作品が集まったものである。昨年の応募総数は20数点、今年は3200点が集まった。審査はその中から200点を選出し入賞20点、更に景観部会賞・委員会賞・審査委員長・会長賞と副会長賞がそれぞれ各1点ずつ選ばれる。応募対象は「愛媛の景観」といったものであるが、どこでどういう風に伝わったか、応募作品の殆どは風景写真である。

確かに景観には違いあるまいが、建築士会主催のテーマ景観写真展からは少しばかり外れてしまった感がある。受賞した方達は明らかに「カメラ大好き少年たち」であった。彼らはあらゆる賞に出没し、賞金稼ぎのように手当たり次第に応募するのである。どのようなかたちで呼びかけを行ったかは知るところではないが、明確なテーマを持つべきであると強く感じた。昨年度の景観賞は20数点と数はおおざかしい程ではあったが、応募作品には建築に対する真摯な目力を感じ好感が持てた。愛媛にはまだまだ見るべき古建築が多数存在しており、魅了的な景観（風景）が多数存在している。テーマが素晴らしいゆえ反省点を交えて次回へと繋げていただきたいものである。

コンテストを終えて

文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和

第2回愛媛の景観写真コンテストが終了しました。コンテストをするにあたり、23年1月から予算や要綱について話し合いを重ね、ZOOM会議、電話、メールなど本当に多くの時間をかけて準備をいたしました。松山担当副会長や北村審査委員長には多くの助言をいただき、景観部会の中でそれらを話し合い、一つの道筋を決めて開催することができました。前回、写真を直接印刷して送っていただく方法は、コロナ禍もありましたが、十分な結果を得ることができませんでした。今回は「Instagram」を使用することで、直感的でしかも自由に投稿できる形を取りました。Instagramについても委員会で検討、勉強会も開き理解を深めたつもりでしたが、いざコンテストを始めると思った以上の応募数で、うれしい事ですが対応に困る一面もありました。また、選考も大変で、データの打ち出しも含め、中山さんの負担も非常に大きかったのが問題です。

萬翠荘での展示会は素晴らしいものとすることができました。およそ200点を展示いたしました。ただ、展示

作品に選ばれる方は「インスタ慣れ」をしている方や写真が上手な方が多く、特定の方の写真が多くなってしまったのは残念でした。すばらしい写真を間引くのはもったいないのですが、様々な方が応募してくださっているので、これについても改善の余地ありでした。受賞作についてももっと要綱をしっかりとすべきと思ひ、応募してくださった方や建築士会にもご迷惑をおかけしてしまう事がありました。

第1回と比べ、格段に成功を収めた第2回景観写真コンテストでしたが、北村委員長が述べられているように反省点も多くみられ、次回への課題とさせていただきます。委員会としてもしっかりと反省し、第3回へつなげることができればと思っています。「景観」とはいったい何でしょうか。私たちが設計し、建築物を作るにあたって、自己満足にならず、その地域の文化に寄り添う建物を作るために考えていかなければならない課題の一つです。

今回は自由な視点から景観を一般の人から応募いただきました。その一般目線と私たちの景観のずれはどこにあるのか。課題を解くヒントになりえるコンテストになったのではないかと思います。分析結果は曾我部副委員長中心にまとめていきたいと考えています。

反省ばかりになってしまいましたが、時間のない中、本当に頑張ってくれた景観写真コンテスト実行委員の皆様、いつも応援してくださる松山担当副会長、GOを出してくださった会長、副会長、総務委員長、ご協力いただいた北村審査委員長、文化財・まちづくり員の皆様、縁の下の力持ち土会事務局の皆様、そして何よりご応募くださった皆様、ありがとうございました。未熟ではあります。今回もコンテストを終えることができました。次回に必ずつなげていきます。今後ともよろしく願いいたします。



▲表彰式にはたくさんの方が来ていただきました。ありがとうございました。

とびだせ建築士「橋をつくろう」

青年委員会 委員 白石 耕平

開催日：令和6年2月19日
 場所：東予高校 実習室
 参加者：東予高校建設工学科 1年生17名
 青年委員：高木伸幸、遠藤彰騎、政石信行、瀬尾祐貴、白石耕平

青年委員会では「とびだせ建築士」を実施しています。「とびだせ建築士」とは…県内の高校生を対象に、我々建築士と直接交流する機会をつくり、共に考え、学びを通じて建築の楽しさを知ってもらうことを目的としています。

今回も東予高校建設工学科の生徒・先生に協力をしていただき、第6回「橋をつくろう」を開催しました。



▲高木さんによる開講挨拶とルール説明

「橋をつくろう」とは、30cmの間隔をあげたH鋼に指定された材料を使って橋をつくり、荷重をかけてどれだけ持ちこたえられるかを競うという内容です。

- 材料：マグネット50個、竹ひご180mm×4、割り箸1組、半紙1枚、糸1m×2本、クリップ4個、セロテープ300mm×6本、A4紙1枚、輪ゴム2本
- 制限時間40分
- 1組ずつタイルを載せて実験し、何枚載せられるか。下からH鋼や橋を支えるのは禁止されています。

生徒達自身に考えさせるというスタンスなので、昨年同様我々建築士会からのアドバイスはないまま、実習は始まりました。昨年、建築士会チームはデザイン性に優れた見事な吊り橋を作ったのは良かったのですが、結果は最下位だったので今回は建築士としての面子を保ちたい気持ちが強くありました。各班試行錯誤しながら橋づくりに取り組み、制限時間の40分というのは思いのほか短いもので、いよいよ実験。



▲各班で話し合い、橋を作っている様子

予想枚数、結果枚数、どこが壊れたかを記録しながら東予高校4班と建築士会チームの計5班で実験。タイルを載せる度に生徒の皆さんが一喜一憂する姿は微笑ましい光景でした。

そして最高記録も飛び出し、実験は盛り上がりました。これまでの記録を大きく上回る45枚！



▲実験の様子

生徒の皆さんが楽しみながら実験し、学びを得る。単純に競うだけでなく、失敗の原因や解決策を一緒に考えるということに、この活動の大きな意味があります。

「とびだせ建築士」という活動を継続して行うことで、未来の愛媛の建築業界を担う後進育成の一助になって欲しい、という思いもあります。

そして今回、「とびだせ建築士」に協力していただいた生徒さん達が、将来愛媛県内の建築業界で活躍し、建築士会でも一緒に活動できればと願っております。

※ちなみに建築士会チームは最下位こそ免れましたが、東予高校の生徒さんが記録した45枚と比較すると、面子が保てたとは思えませんでした……。

来年に期待しております。

令和5年度 全国青年委員長会議報告

青年委員会 委員 武智 良太

開催日：令和6年3月16日(土)～17日(日)

開催場所：女川町まちなか交流館他(宮城県牡鹿郡女川町)、せんだいメディアテーク(宮城県仙台市)

参加者：愛媛から1名参加(武智)

3月16～17日に宮城県にて行われた、令和5年度全国青年委員長会議に委員長代理として参加させていただきました。

初日はまずは牡鹿郡女川町へ向かいました。女川町まちなか交流館にて、女川町総務課公民連携室室長の青山様を講師としてお招きし、東日本大震災からの復興まちづくりの具体的な取り組みを拝聴させていただきました。

引き続き、青山様のご案内で女川町のまち歩き。講話でもご説明いただいた、駅前広場及びプロムナードや、東日本大震災遺構 旧女川交番を視察。



▲女川駅舎から復興したまちを望む



▲震災の爪痕 旧女川交番

夜は、仙台市に場所を移し、意見交換会。普段なかなかお話しする機会のない全国各地の皆様と、お酒を交えながら意見交換を行うことが出来ました。



▲仙台市内 CROSS B PLUSにて意見交換会

2日目は、全国で活躍されている青年建築士お三方を講師としてお招きし、木造・木質化をテーマとした事例紹介及びクロストークが行われました。



▲2日目の会場・せんだいメディアテーク

先進的かつ重厚な、モチベーションアップに繋がる充実した講演内容でした。



▲質疑応答の様子

この2日間、普段なかなか得ることの出来ない情報を目と耳を通して得ることが出来た気がします。

そしてまた機会を見つけて宮城県を訪れることが出来れば。

堀部安嗣講演会 「これからの住まいを考える」

青年委員会 前委員長 和田 崇

開催日：5月18日(土) 15:00~17:00

参加者：119人

主催：愛媛県建築士会／共催：日本建築家協会愛媛地域会

松山市総合コミュニティセンターにおいて建築家・堀部安嗣さんの講演会を開催しました。コロナ禍以降の事業としては一昨年度に伊礼智さんをお招きして以来の講演会となりました。

堀部安嗣さんは吉村順三氏の流れをくむ建築家で、日本建築学会賞(作品)、毎日デザイン賞などを受賞された現代の住宅設計の第一人者です。個人的にも高知や東京、鹿児島まで作品を見に行くほど思い入れのある、敬愛する建築家です。建築士会会員でもある建築家協会(JIA)愛媛地域会の中尾さんが堀部さんに愛媛での講演会の開催をお願いしている、という話を聞きつけた私がぜひ士会も一緒したいとお願いして今回の企画が実現しました。



▲ 講演会風景

JIAのお二方(中尾さん・白方さん)に加え、伊礼さんの講演会メンバーに再度お声がけしたところ、みなさん快く引き受けてくれました。それぞれ忙しい中、これだけのスタッフが揃うというのは建築士会の本当に素晴らしいところだと思います。会場設営の場面では、花岡副会長の口ぐせでもある「ここぞという時の集中力」がいかに発揮されていました。

今回の事業での新しい試みとして、県内の普通科高校に対しても案内を送りました。数名ではありましたが、実際に足を運んでくれた生徒がいたことをとても嬉しく思いました(建築に興味を持つ若い方が増えて欲しい)。また、開催準備期間中は懇親会場の選定という名目でJIAの方々との親睦を深めることが出来たことも大きな成果でした。これから愛媛の建築界は縮小していくことは

避けられないので、各団体間でさらに協力していくことが必要だと感じています。



▲ 堀部さんとスタッフ集合写真

◎講演会・懇親会でのお話で特に心に残ったこと

良い建築の条件：澄んでいること

人の心身に必要なこと：暖かく・柔らかく・よどんでいないこと

今の状況を悲観しない。傍観者ではなくプレーヤーであれ

(若い人へのメッセージ)フェイクではない本物の建築を作りたい

身近にある瀬戸内海など自然の素晴らしさ(気づいていない人が多い)

慌ただしく過ぎる日々の中、一旦手を止めて建築の本質について考えることの出来る貴重な機会となりました。(気負い過ぎたためか、謎の胃痛で2次会に参加出来なかったことが心残り……)

最後になりましたが、今回の講演会にご協力・協賛いただいたみなさま、本当にありがとうございました。



▲ 堀部さんを囲んで懇親会



◀ 市内電車を撮影する
撮り鉄の堀部さん

女性委員会「暮らし+ (プラス)勉強会」 春色トピアリー作りワークショップに参加して

女性委員会 委員 鷲尾 ひろみ

日 時：2024年3月24日(日)

場 所：なかやまフラワーハウス(伊予市)

参加者：大人9名と女の子1名

湯水に泣いていた中予にとっては恵みの雨の中、まるで物語の中のような霧流れる伊予市中山町中山・花の森ホテルに集合しました。まずは、委員会を開催しました。下元委員長のもと年度末最後の集まりとなりました。



▲レストラン風花にて ランチの様子

委員会のあと参加者全員で同ホテルのレストラン風花(ブーク)にて地元の素材を活かした美味しいランチをいただきながら、楽しく情報交換の時間を持ちました。私自身コロナ禍ではオンライン参加ばかりで、久しぶりの対面での集まりはとても楽しい時間となりました。

食事のあとワークショップ予約時間まで、まずはホテルのロビーでお土産の栗ようかんと柿ようかんを購入しました。ホテルには宿泊券が当たるガチャポンがあり、小さな参加者さんは可愛いダークみきゃんのぬいぐるみが当たって、喜ぶ様子が愛らしかったです。

トピアリー作りのワークショップでは、保存の特殊加工を施したプリザーブドフラワーをグルーガンで球体の発泡スチロールの台座に接着し、幹に見立てた木の枝をつけたトピアリーを、苔を敷いた木の箱に猫のフィギュ



▲松本零土さんのサイン
(ホテルロビー展示)



▲恵みの雨



▲花の森ホテル フラワーハウス

アなどと一緒に思い思いに並べました。皆、初めは先生の見本を改めて眺めたり、迷って周りに相談したりしていましたが、もともとのづくりが好きな人の集まり。同じパーツから個性あふれる素敵な作品が出来上がりました。途中、お花のパーツの追加を「追いフラワーください」と楽しくはしゃぎ、童心に帰りました。小さな参加者さんも長時間頑張ってくれました。



▲トピアリー ワークショップの成果

雨模様でも広い温室はゆったり散策でき、可愛い紫陽花の鉢植えもお土産に買いました。

帰りも霧深いどこか幻想的な道を車で走りつつ、花の森ホテルのエントランスの特徴的な庇を思い出し、同行したスタッフと、庇のことを「霧除け庇かりよひさし」とも言うことや、日本ならではの気候と建築の関係についてなど少しまじめな話もしつつ、休憩に寄った道の駅ではやっぱり地元産のスイートポテトやプリンを見つけて購入し、楽しい日曜日を過ごしました。仕事ばかりではなく、このような時間を持つことの大切さを改めて実感した日曜日でした。

なかやま交流促進センター 花の森ホテル
なかやまフラワーハウス
えひめグリーン・ツーリズムサイト
<https://ehime-gtnavi.jp>

「暮らし+ (プラス) 勉強会」 に参加して

女性委員会 委員 尾崎 千尋

3月24日の日曜日、トピアリー作りというものを体験してきました。

会場は、中山にある「なかやまフラワーハウス」さん。



▲ワークショップの様子

国道から少し山の方に上ったところに大きなハウスがあり、その中で体験しました。珍しい樹木や草花が展示してあったり販売していたり、目にも鼻にも肌にも良さそう！ その場所は日常から離れた素敵な空間でした。子育て真っ最中の自分は、その中で集中して作業したりわいわいと談笑した事にとっても癒されました。

1人1人と同じBOXやドライフラワー、プリザーブド等を準備してもらっていて、それを組み立てていきます。同じようになるのかと思いきや、指す花の位置や長さ、モチーフの位置などでひとつとして同じものがない！



▲初めて作ったトピアリー

私は頭の中でストーリーを作り、組み立てていきました。そう話すと、「私も！」という方。実は皆それぞれのストーリーがあったのかも!? 聞いてみたかったな。と帰り道ちらっとよぎるのでした。

ところでトピアリーって言葉、皆さん知っているでしょうか？ 私は今回の体験で初めて言葉を知り、意味も解らないままトピアリー作りをしました。はて、トピアリーとはなんだろう。と思いつつ、後日ネットで検索してみました。

「トピアリーとは、常緑樹や低木を刈り込んで作成される西洋庭園における造形物」だそうです。ああ、海外の映画で、大きなお屋敷にある庭で見るあれですね。なるほど、確かに植栽を刈り込んだようなイメージ。今回のトピアリーもそれから広がってできたようです。

A1に美しいトピアリーのある庭園で作ってもらいました。和の庭の木の刈り込みにも似ているような。面白いですね。



▲A1で作ったトピアリーのある庭園

今回は暮らし+ (プラス) 勉強会の前に、合わせて女性委員会も、近くのホテルの会議室で行いました。いつもと違った場所で行う会はいつもより和やかな雰囲気。また可愛い5歳の子が同席だったので、にこやかで癒される委員会となりました。

その後皆でランチを囲み、トピアリー作りの会場へ。この日はあいにくの雨、中山は霧に包まれた天気でしたが、日々のドタバタを忘れられた良い一日となりました。仕事や家事とは違う何かを体験することは、休憩にもなるし刺激にもなる。体験した事が設計にも影響してくるんだろうな。と改めて考えた一日でした。

松山支部 支部長 花岡 直樹

昨年度は、5月にコロナが5類に移行し、ほとんどの活動がコロナ前と同様に行われ、復活の嬉しい年度となりました。建築士の日の行事として、子供たちと住宅模型を作る「家づくり体験」をはじめとして、夏の支部会員の集いと称したビアガーデンでの懇親、研修バスツアーとして丸亀への小旅行、地区対抗ポウリング大会&懇親会など、4年振りの行事もたくさん開催することができ、私も本会行事にも積極的に参加しました。全国大会（しずおか大会）に松山支部から25名が参加、井上竜治氏、佐々木幸子氏が連合会会長表彰を受賞されました。また、県の青年委員会主催のソフトバレー大会には松山支部から3チームが参加し、Bチームが第3位を獲得するなど、みなさんととても頑張りました。私も急遽出場することになり、尾藤会長が参加した四国中央チームと対戦し、何とか勝つことができました。

そして、今年度も全開で活発に活動をと行われた、令和6年度の支部総会について報告をさせていただきます。総会のあとの懇親会には、なんと100名を超える参加があったことを申し添えます。大勢の皆さんのご参加に感謝です。

<松山支部総会の報告>

1. 日 時 令和6年4月30日(火)
18:15~18:45
2. 場 所 ネストホテル松山2階 ネストホール
3. 出席者 出席82名
(正会員:60名、来賓:1名、賛助会員21名)
4. 黙とう 物故者 3名
5. 開会

松平副支部長より、松山支部正会員497名中、出席307名(委任状含む)で、本総会は支部規約第15条第1項に定める定足数の3分の1以上が出席しており、成立している旨の報告をした。

続いて、支部規約第9条第1項の規定により、花岡支部長が議長となり審議を進めた。

6. 議事

第1号議案 令和5年度事業報告の承認について

第2号議案 令和5年度収支決算の承認について
佐々木監事より監査報告を行った。

議長より、第1号議案、第2号議案について諮ったところ、異議なく議決された。

第3号議案 令和6・7年度役員承認について

役員選出委員会での案を提示し諮ったところ、異議なく承認された。

第4号議案 令和6年度の事業計画決定について

第5号議案 令和6年度の収支予算の決定について

議長より、第4号議案、第5号議案について諮ったところ、異議なく議決された。

以上、議案の審議等を18時30分に終了した。

このあと功労者表彰、感謝状贈呈を行った。

功労者表彰：峰岡秀和氏

感謝状贈呈：東昇技建(株)



▲総会の様子



▲表彰式の峰岡秀和氏の謝辞の様子。手前右は愛媛県建築士事務所協会中予支部長の正岡氏（左：東昇技建様、右：峰岡氏）

このように活発な活動を行ったことにより、令和5年度の収支決算は、ほんの少しですが赤字となってしまいました。切り詰めるところは切り詰めますが、活発化した活動を制動することなく、今年度も大いに頑張っていきたいと思っております。

毎年同じ事を言っていますが、私の基本理念は「人材育成」です。松山支部の活動のあとに、多くの人が建築の仕事を楽しんでいけるよう、みんなで力を合わせて松山支部を盛り上げていきましょう！特に若い方々のご参加を期待しています。今年度もどうぞよろしく願いいたします。

建築の異邦人

松山支部 藤岡 俊樹

松山支部の島本さんからバトンを受け取りました、松山支部の藤岡と申します。

私は異業種から建築の世界に入りました。建築の世界に入る前は建築とは全く関係のない職種の公務員をしていました。大学卒業後、東京で約10年間公務員を勤めた後、建築士資格の受験資格を得るために出身地である愛媛に戻り、専門学校に2年間通いました。建築の世界に飛び込みたいと思ったきっかけは、自分の家を自由に思うままに自分で設計して建てたいという思いが強くなり、気持ちの赴くままに身を任せたという感じです。異業種から転向して、早7年ほどが経過しているかと思うと、時間が経つのは早いと改めて感じます。経験値を簡単に稼げるとは思っていないため、せめて資格だけでも武装しようという思いで、建築士資格の取得については貪欲に臨みました。総合資格に通った甲斐もあり、一級建築士資格を取得することができました。あとは、経験値を積みまくってレベルアップを図るのみです。現在、いわゆるレベリングの日々を送っております。新築、リフォーム、営業、設計、と様々な状況・立場で日々、戦っています。

さて、ここからは私がどんな家が好きで、どんな家に憧れているのかわかる作品を紹介したいと思います。

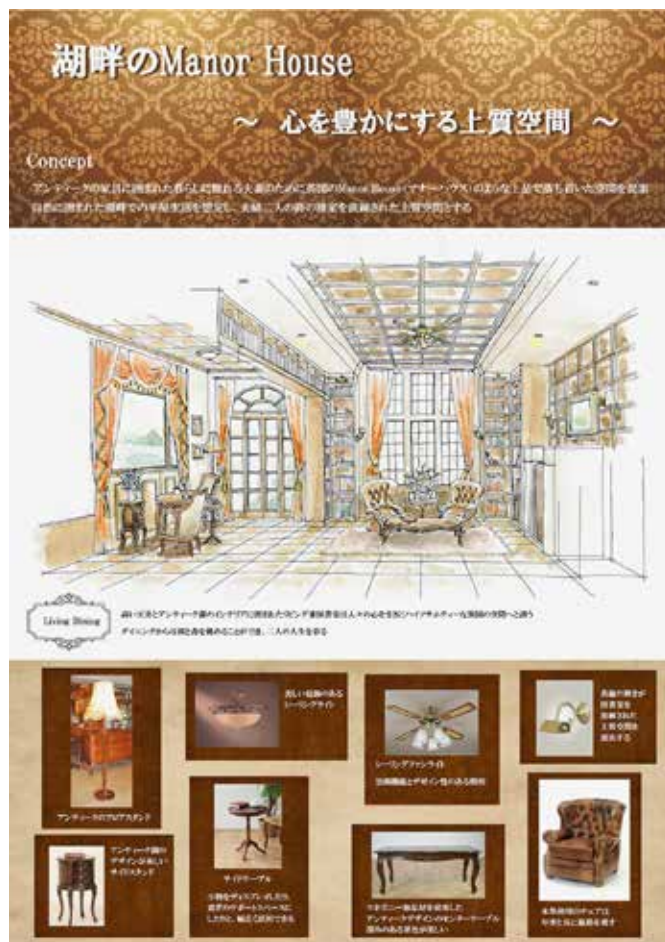


▲松山にある萬翠荘を藤岡がスケッチ

私は洋風の建物が大好きなのですが、スケッチした萬翠荘のように和洋折衷スタイルも大好きです。さすがに、このような洋館を建てて住もうとまでは思わないのですが……。いつかこのような洋館をコンパクトサイズにした家を設計して建ててみたいという野望はあります。そういうことをしてみたい、と思ったら、もう建築の世界に飛び込まずにはいられないじゃないですか。

また、さらっと自慢げに萬翠荘のスケッチを持ち出しているように、私は絵を描くのがもともと大好きで得意としています。自分が描いたものを形にしようと思ったときに、形にするためのノウハウをもっていれば、より自分のイメージに近づけることができると考え、自ら建

築の世界でノウハウを学んでいるというわけです。自分の憧れや構想を形にする手段・方法を体得すべく建築の世界に身を置いているわけですが、学ぶべきことは非常に多く、興味深いことも多いです。正直いうと、住宅の性能に関しては全く興味がなかったのですが、現実の住宅を取り巻く環境は目まぐるしく変わってきていて、高気密高断熱といった高性能住宅が新たなスタンダードとなりつつあるなか、実務で住宅を提供している立場では、当然デザインだけでなく性能も考慮しなければならなくなってきています。建築家のルイス サリヴァン(Louis Sullivan)が述べた格言に「形態は機能に従う」という言葉があり、「デザインの美しさは機能に従属する。」というもので、「機能を追及すれば、おのずと美しいものができる」と言い換えることができると思います。昨今の住宅の外観は、性能とコストを重視したシンプルなものが多いように思います。人それぞれの好みだと思いますが、敢えて装飾に拘った形式重視の家も面白いと思うのです。いつか藤岡ワールド全開の建築をまたお披露目したいと思います。



▲藤岡作のプレゼンテーションボード

建築士から見た空き家問題

西予支部 水口 優太

西予支部の和氣巨秀さんより、けんちくの輪のバトンを受け取りました、西予支部の水口優太です。

テーマについて何を書こうかと悩みましたが、私が昨年度まで担当業務として携わっていた、現在社会問題になっている空き家について、書いていこうと思います。

国の統計では、平成25年時点で全国の空き家に該当する建物は820万戸存在しているとされており、昨今の少子高齢化や人口流失により、今なお増加傾向にあります。私が生活している西予市も同様で多くの空き家があり、空き家対策係に配属され対応しておりました。

基本的には、個人の所有物である住宅は空き家になっても、個人が維持管理するよう民法でも記載されています。しかし、様々な事情により、管理者が決まっていない、そもそも空き家の存在自体認知していないようなケースもあり、放置されている空き家が増加しています。そうすると、行政が対応せざる得ない場合もあり、その多くが築年数が古く、劣化が進み崩壊・倒壊の可能性が高い危険な建物でした。

空家問題に携わった当初、空き家については、漠然とした知識で、「人の出入りが無くなった建物は傷みやすい」ということは知っていました。多くの空き家を見てからは、窓の開け閉めが無くなることで湿気がこもり、木造住宅の天敵であるシロアリが繁殖しやすい環境になったり、小さな破損から雨漏りが発生しても発見が遅れ腐食が進行するといったプロセスがあると、実体験として理解できるようになりました。

人が出ていき、管理されずに朽ちていつている、役目を終えた建物を見ていると、建物を建てることばかり学んできた身としては、何とも言えないもの悲しさを感じてしまいます。

破損・劣化が進み、人が住めないような状態になった建物は、解体する他ありませんが、中には直せばまだ住める住宅もあり、そういった建物を移住者の受け皿にしようと、空き家の活用事業も、数件担当しました。

その中でも特に印象に残っているのは、令和2年度に担当した築120年と推定されている、古民家の再生です。



◀ 推定築120年の古民家の外観

「田の字」の間取りの玄関▶



事業の内容としては、個人が所有している空き家を市が期限付きで借り上げ、改修を行ったうえで移住者に貸し出す、といった内容であります。厳密には空家再生を目的とした事業ではないのですが、その地域の中でもかなりの歴史がある古民家であり、家の相続人と地元住民の「このまま朽ちさせてしまうのはあまりに惜しい」ということで強い協力の姿勢があり、事業実施物件に選ばれました。

県内でも古建築の第一人者である、宇和島市の酒井設計・酒井純孝さんに改修設計を協力してもらうことになり、事業がスタートしました。現地を確認すると、床や柱にシロアリ被害が至る所にあり、直径20cm程の松丸太の大引も半ばから腐って折れており、住宅設備も機器・配管の劣化等で使い物にならない状態。そして、一番頭を悩ませたのが、古民家の耐震性の確保でした。

期限があるとはいえ市が管理して住宅として貸し出す以上、耐震性の確保は必須でしたが、基礎と緊結して、接合部を金具で補強し『地震に耐える』ことを主眼に置いている現行の耐震工法と、基礎に柱を置いているだけで、接合部も接手のみで固定せず、ある程度柔軟性を持たせることで『地震を受流す』ように建てられた古建築とでは、建築思想が根本から異なり、耐震評価上で「安全」を確保するのは、手法的にも予算的にも非常に困難でした。ただでさえ、直さなくてはいけない部分が多すぎて、予算内に収めるのが難しい状況だったため、高価な専用金物を使用したり、大規模な改修はできませんでした。

最終的には、愛知建築地震災害軽減システム研究協議会が仕様をまとめている、構造用合板を使用した壁系工法を参考に、耐震壁を多数設置することでN値計算で数値上安全に持っていくことにしましたが、相性の悪い工法を組み合わせている上、建具を取り外せば大空間を確保できる「田の字」の間取りや窓からの遠望など、その建物のいい部分を殺してしまっている感じがして、酒井さんと「これでいいのか？」と首をひねっていました。

予算の都合で十分な改修ができず、若干不満の残る工事でしたが、もう一度建物に新しい役目を作ることができ、良い経験だったと思います。

あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。)

「いしづち」の次号の原稿締切日

令和6年 9月号 (160号) 令和6年7月25日(木)

※校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。

※1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり3枚程度まで題名を付けて添付してください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付してください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々まで、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。 情報・広報委員会

読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしております。

「いしづち」編集委員会(士会事務局内)宛 FAX 089-948-0061

編集後記

聖徳太子ゆかりの寺院であり、聖徳宗の総本山である奈良県生駒郡斑鳩町にある法隆寺を訪れました。

法隆寺は、7世紀に創建され、国宝の金堂、五重塔を中心とする西院伽藍と、夢殿を中心とした東院伽藍に分けられています。約18万7千平方メートルと広大な境内に建造物の国宝だけでなく、金堂の壁画や、薬師如来坐像、釈迦三尊像など寺宝の多くも、国宝に指定(国宝・重要文化財に指定の建物や宝物類は、合計約190件、その数は2,300点を超過している)されているので、しっかりと見学すると大変な時間がかかります。

また、日本の代表的な国宝建造物を語る時、1300年のロマンを感じられる空間である国宝の金堂、五重塔がある西院伽藍を外すわけにはいかないため、ここでは世界最古の木造建築物群である西院伽藍をピックアップして書きたいと思います。

西院伽藍は南大門を入れて正面のやや小高くなったところに位置しています。向かって右に金堂、左に五重塔を配しており、これらを平面「凸」字形の回廊が囲んでいます。回廊の途中、「凸」字の肩のあたりには東に鐘楼、西に経蔵があり、これら伽藍を西院伽藍と呼んでいます。

この日は雲一つない穏やかな陽の光が照らす春らしい天候で、金堂と五重塔が青空をバックに浮き出ている景色は爽快です。

金堂、五重塔、中門、回廊は聖徳太子在世時のものではなく7世紀後半頃の再建ではありますが、世界最古の木造建築物群であることは間違いないなく、特に飛鳥様式とされている金堂・五重塔・中門に見られる建築様式は、組物(軒の出を支える建築部材)に雲斗、雲肘木と呼ばれる曲線を多用した部材を用いていること、建物四隅の組物が斜め(45度方向)にのみ出ること、^{つか}平くずしの高欄(手すり)、それを支える「人」字形の束など、全てが素晴らしい造形美です。

また、五重塔の五重目の軸部が初層の半分の大きさとなっており、これに深い軒の出が相まって安定感を与え、全体が調和のとれた二等辺三角形に収まっています。細部まで手間を掛けているので時間を忘れるほど見惚れます。

修学旅行以来の訪れでしたが、この歳にならないと感じられないことも多数あり、感慨深いものでした。皆さんも改めて訪れてみてはどうでしょうか。

〈いしづち〉2024/7

令和6年7月発行

発行人 会長 尾藤淳一

発行所 公益社団法人 愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5 愛媛県建築士会館2F

TEL(089)945-6100 FAX(089)948-0061 <http://www.ehime-shikai.com>

印刷所 アマノ印刷有限会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長/大平 将司 副委員長/渡邊 道彦

編集委員/池川 佳代 河合 優志 西岡 亜有美 西森 勉